

Hiroshima City University's founding principle is to become an international university which contributes to world peace and to the prosperity of the community through education and research in science and art.



No. 097
Dec. 2025
広島市立大学
広報誌



情報科学部棟3階に「313 Lounge」をオープン

2025年7月、「パソコンを活用した学修に最適な、カフェやリビングのような心地よい空間」をコンセプトに、機能性とデザインにこだわったラウンジ「313 Lounge」をオープンしました。このラウンジには、無線LANを整備し、空き時間や授業後の自習・グループワークに利用しやすい机や椅子を配置し、約100インチの大型ディスプレイも設置しています。また、学会などの発表で作成したポスターや芸術作品を展示できる



スペースも設けています。学内での利用にとどまらず、研究交流会や卒業生を招いた就職支援イベントの開催、さらには地域の方との交流拠点としても活用する予定です。



内装は実用性と素材美を兼ね備えたインダストリアルデザインを採用



本学における博士学位取得者

2025年度 秋季修了 ※敬称略

情報科学研究科 博士(情報工学) 亀山 勇希

外部資金の獲得 ※昨年度実績

本学の教員は、国の制度である科学研究費助成事業や民間からの研究費などを受けて活発な学術研究活動を行っています。これらの外部資金を活用し、独創的・先駆的な研究に取り組んでいます。

2024年度 科学研究費助成事業獲得状況＜研究種目別＞

研究種目名	件数	交付決定額
基盤研究(B)一般	2	8,900千円
基盤研究(C)一般	47	47,300千円
若手研究	10	12,100千円
研究活動スタート支援	1	1,700千円
合計	60	70,000千円

2024年度 受託研究費・共同研究費・補助金・奨学寄付金

区分	件数	交付決定額
受託研究費・共同研究費	56	75,511千円
補助金	3	31,030千円
奨学寄付金	13	12,500千円
合計	72	119,041千円

West Breezeについての
ご意見やご感想はこちらへ

広島市立大学 広報委員会
E-mail kikaku@m.hiroshima-cu.ac.jp
Tel 082 (830) 1666 Fax 082 (830) 1656



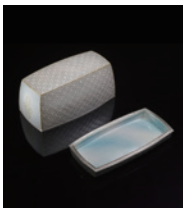
West Breezeの最新号・バックナンバーはウェブサイトからご覧いただけます。

広島市立大学広報誌のタイトル「West Breeze」は、広島市立大学のある西風新都にちなんで命名されました。
[West Breeze 97号] 編集・発行／広島市立大学 広報委員会 発行日／2025年12月1日

表紙作品

2024年度
芸術学研究科(博士前期課程)
造形芸術専攻(金属造形) 修了
栗根 誠一郎
七宝箱「白銀回」

H130×W200×D100 mm
銀、銅、七宝釉薬
2024年度 修了制作優秀賞 /
芸術資料館買い上げ作品



ICHIDAI NEWS

最新の
いちだいニュース



事例でみる 市大の地域貢献

広島市の公立大学として、地域と共生し、市民の誇りとなる大学を目指す本学は、学生や教職員が市民・地域社会・企業等と協働、連携して、地域が直面するさまざまな課題の解決に取り組んでいます。



高校生と共同制作した再生紙折り鶴アート

01 被爆80年、 再生紙折り鶴で次世代へバトンをつなぐ

学生 × 企業

協働・連携する外部の団体等：株式会社文華堂



学生がつなぐ、
平和な世界の実現のために「自分にもできること」

被爆80年という節目を迎える中、芸術学部1年生3名が、若い世代が戦争や平和に関心を持たず日々を過ごして



いる現状に、広島市の学生として危機感を抱きました。そこで、「おりづる再生紙」を使ったアート作品の制作を通じて、人々と対話し、平和への想いを未来へつなげるプロジェクトを企画しました。

まず、広島平和記念公園に捧げられた折り鶴を「おりづる再生紙」に生まれ変わらせて名刺などを作り販売している株式会社文華堂を訪問し、担当の方からお話を伺って、折り鶴に託された平和への願いを昇華させる意義を考えました。

そして、平和記念公園にテントを立てて、海外や県外から訪れた方に折り方や再生過程を伝えながら、一緒に鶴を折りました。海外の方とは言葉の壁を越えた交流を図ることができました。

02 芸北の茅葺き文化を未来へつなぐプロジェクト

学生・教員 × NPO法人

協働・連携する外部の団体等：NPO法人西中国山地自然史研究会



芸北から伝える、暮らしの知恵

このプロジェクトは、芸北エリア(広島県北西部)の自然環境や暮らし方に注目し、その価値を次世代へつなぐことを目的に実施しました。かつて中山間地域の生活に欠かえなかった茅葺き屋根の家々は、瓦屋根の普及、少子高齢化、地域のつながり方の変化、職人の後継者不足などにより、今では数えるほどにまで減少しています。一方で、地域で茅を育て、持ち寄り、互いに協力して修繕してきた仕組みや人のつながり方には、現代では失われつつある多くの知恵があります。この茅葺き文化が持つ価値や意味を考え、伝えることを重視する「インタープリテーション」の手法も取り入れ、地域のこれからを考える場を広げていくことを目指しました。

まず、プロジェクトに参加した学生たちで、茅葺き文化の知恵や暮らしの営みに触れるため、地域住民や茅葺き職人、専門家の皆さんにご協力いただき、茅にまつわる自然環境や植生について学び、茅葺きの構法や屋根葺き作業を体験しました。また、茅葺き住居では断熱性や調湿性などを実際に体感し、茅葺き住居の知恵や工夫も学びました。

その後、体験プログラムを企画し、自分たちが学んだこ

とを発信する過程を通して、参加学生の間で、茅葺き文化の伝承を自分自身の課題として考える姿勢が生まれつつあります。中には、自身の出身地の住居や暮らしを調べ始めた学生もあり、芸北での学びが広がりをを見せています。

本プロジェクトでは、地元のNPOや都市部の市民団体とも連携し、さまざまな人たちとともに取り組むことで、学びの広がりと継続も意識してきました。このプロジェクトで得た学びとつながりが、地域に根差した活動のさらなる発展に結びつくことを期待しています。



地域共創センター



地域共創センターは、地域の皆さま、産業界の皆さまと大学をつなぐ窓口です。
連携事業などのお問い合わせがございましたら、本学教員とのマッチングを行いますので、お気軽にご相談ください。

事例でみる市大の地域貢献

大学と地域が連携して課題解決を目指す

03 | VR映像による広島の魅力発信 課題提案地域団体:VR旅行DAO



360度カメラを使った映像収録

広島市およびその周辺地域の魅力発信の新しい方法として、「VR旅行DAO」から課題提案を受け、VRなどの技術を使った体験性の高い発信方法の実現に取り組んでいます。現在は、プロジェクトに参加する学生（情報科学部3年生、情報科学研究科博士前期課程2年生）が実際に広島市を中心とした観光地や自然環境を調査したり、美術館での体験型イベントなどに参加して対象の理解を深めたくうえで360度カメラを用いた映像収録を行い、その映像をVRシステムや既存インフラで提示できるコンテンツの作成を進めています。今後、秋から冬にかけての風景やイベントのコンテンツ映像の収録にも取り組んでいく予定です。

04 | だんばらのえんこうさん 課題提案地域団体:段原おやじの会



絵本『だんばらのえんこうさん』の一場面 (絵:城井文)

段原地区(広島市南区)は、比治山という山が盾となり、原爆の致命的な被害を免れました。古い町並みが長く残っていましたが、その後、大規模再開発によって新しく生まれ変わりました。地域のボランティアグループ「段原おやじの会」から、地域の歴史や記憶を絵本にして次世代に残したいとの課題提案を受けて、芸術学部の城井文准教授が中心となり、地域に伝わる妖怪「えんこう(猿猴)さん」をモチーフにした絵本を制作。物語は、現代の子どもが昭和40年代頃の段原にタイムスリップして、「えんこうさん」と一緒にまちを探検するというものです。今後は、学生を交えて紙芝居上演や原画展などを企画します。

05 | ふうどの庭 学生自ら課題を選定



国際学部棟の中庭に作った畑で苗植え

「おいしい」「楽しい」を入りに、地域とつながり、持続可能な農や食文化について考える場を創ろうと、大学内で小さな畑づくりに取り組んでいます。前期は多くの学生と収穫から料理し食べるまでを共にすることで、農の現場と食卓の距離を近く感じてもらう企画を実施しました。後期は、生産者訪問と共に食卓を囲んで畑や生産者と自分たちの関係性について話し合う機会を企画し、小さな畑から食を通して社会に目を向けるきっかけを作ります。ゆくゆくは大学内での循環、他の生物種との共生、自然とのつながりの再構築、地域の「リジェネラティブ・コモンズ（再生型共有地）」となることを目指しています。

在学生、卒業生を問わず、国内外のさまざまな分野で活躍する「市大人」を紹介します。

活躍する市大人

本学の芸術学研究科を修了し、現在、株式会社中国新聞社に勤務する石井将文さんにお話を伺いました。

サービスを通じて見つめる地域貢献



株式会社中国新聞社
メディア開発局 メディア開発部長

いしい まさふみ
石井 将文 さん

芸術学研究科（博士前期課程）
造形計画専攻 2004 年度修了

一大学院時代どのようなことを学びましたか。

学部時代は、広島工業大学建設工学科で都市計画や建築意匠を学んでいました。所属していたゼミが爆心地を3DCGで再現する市大のプロジェクトに協力していて、そこに参加し始めたのがきっかけで市大を知り、ライフワークとして定期的に開催していたイベントで必要なフライヤーやグッズなどの制作をするうちにデザインへの興味関心が強くなって、市大の芸術学研究科へ進学しました。大学院では、デザインはコミュニケーションの一つなんだということを学んだと思っています。自分が作りたいもの

を作るのではなく、それを見た人、使った人どう感じてほしいかを考えることが最も重要で、それについて深く考える時間を持てたのは非常に大きかったです。また、デザインは領域が広くて、いろんな手法に取り組んでいる仲間がいたので視野を広げられたかなと思っています。

一現在のお仕事について教えてください。

地元の新聞社で主にデジタル領域のサービスや事業の企画立案からサービスの成長につなげる取り組みまでを担う部署で働いています。直近では、2024年3月にリリースしたニュースアプリ「みみみ」と地域共創プラットフォーム「たるボ」のプロジェクトマネージャーなどを務めています。「たるボ」は、ID一つでさまざまなサービスを利用でき、ビジネスとしては、会員管理にポイント管理やデータ分析などのさまざまな付随機能を搭載した基盤を業種業態に関係なく提供しています。コンセプトは「地域共創プラットフォーム」です。地域のさまざまな企業が参画できるこのサービスを通じて、地域や企業の課題解決や事業創出につなげていき

広島電鉄「走る美術館」4コマ漫画ジャック
～広島市立大学あるある西風劇場～

広島電鉄株式会社が、運行する路面電車の車両内をギャラリーに見立て、市民の芸術作品を展示・鑑賞できる全国初の取り組み「走る美術館」を実施しています。本学の学生広報クルー「いちレポ」が、この「美術館」に出展して路面電車を利用する皆さんに本学の魅力を発信する取り組みを企画しました。学生・卒業生・教職員から募集した本学「あるある」エピソードを基にした全54作品の4コマ漫画「広島市立大学あるある西風劇場」を、芸術学部の学生たちが同学部教員の監修のもとで制作しました。



6月



企画ミーティング

学生広報クルー「いちレポ」のメンバーが集まり企画ミーティング

10月



作品が完成

3学部と平和学研究科のイメージカラーを施した作品を、学内の設備で印刷・裁断して完成

「西風劇場」の幕開けです！



2025年11月1日から12月25日まで路面電車1・3・5・7号線で展示

9月



作画の様子

学生や卒業生、教職員から集まった市大あるあるネタをもとに、芸術学部の学生たちが漫画を作画

運行前日



車両に展示

できあがった作品を車両内に設置して、あとはお披露目待つのみ…



AWS Summit 2024で「たるボ」発表の様子



同僚と出席したグッドデザイン賞授賞式

いと力を入れています。

一仕事のやりがいについて教えてください。

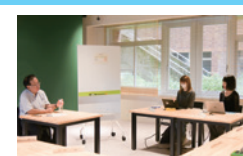
「たるボ」はリリースから1年半で会員30万人を突破し、ビジネスとの連携も進んでいます。「みみみ」では 2024年のグッドデザイン・ベスト100を受賞しました。新聞社と聞くとオールドメディアと感じるかもしれませんが、ライフスタイルの変化で接触手法は多様になっても、生活する上で情報は欠かせないもので、地元からの信頼は依然として高いと感じています。実は地域でのビジネス上の接点としても結構重要な役割を果たしていて、業種に関係なく連携ができるおもしろい立ち位置の会社です。そんな弊社だからこそできる仕事があると思っています、それが私の仕事の原動力になっています。漠然と考えていた「地域貢献」が具体的なイメージになってきて、今までにない事業連携を実現できたらと、とてもやりがいを感じています。

一大学院での学びは、今の仕事にどんな影響を与えていると思いますか。

私は、「イメージできないと実現（成功）しない」と思っています。これまで実現してきたいろんなサービスでも、利用体験や機能面、運用面など一つ一つをできるだけ具体的に解像度高く考えることを大切にしてきました。イメージしておくことで、中長期的なニーズや変化にもスムーズに対応できます。そういう意味でデザイン思考はビジネスのさまざまな場面でとても役立っていて、自分の強みの一つだと思っています。

一後輩たちへメッセージをお願いします。

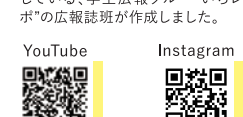
世の中はタイパやコスパなど「パ（パフォーマンス）」に溢れています。社会に出るともっと「パ」の良さを求められますが、学生というポジションはそんなことに無関心でいることを許容され、無駄なことにも思いきり時間を割ける、いわばゴールデンタイムです。そこでしっかり自分の余白を作っておくことが社会に出たときにとても役に立ちます。枠にとらわれず、興味がある事にはなんでも首を突っ込み、足を運んで、これは誰にも負けないという強みを見つけてください。



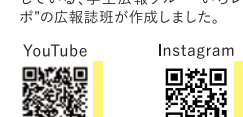
学生との意見交換会の様子



いちレポ公式キャラクターゼフィ



YouTube



Instagram

この記事は、学生の目線から本学の魅力を発信することを目的に活動している、学生広報クルー「いちレポ」の広報誌が作成しました。

講演会後の学生との意見交換会に参加しました



講演会の様子

講演会後、313ラウンジで行われた学生との意見交換会では、村井理事から「インターネットを活用して3学部が連携し、学部を超えた協働を進めることで、地域から世界へと活動の幅を広げられる」とい、市大の可能性についてお話があり、「AIにはできない人間ならではの力で、広島文化をきつかけに人とつながり、信頼できる仲間を増やしてほしい」と学生に向けてメッセージをいただきました。

講演会などを通じて、インターネットは単なる技術ではなく、人々を結ぶ「人脈」であり、信頼を築くための重要な手段であることを学びました。人となりがこの大切さをあらためて考え、これからの学びや活動にどう生かしていくかを考える貴重な時間となりました。

編集統括・デザイン:芸術学部3年 高橋 南帆 ライティング:国際学部4年 金井 咲季・国際学部4年 富原 彩月 企画:いちレポ 広報誌班

「いちレポが行く」

日本のインターネットの父
村井理事の講演会に潜入！



いちレポ 富原 彩月 村井純理事 いちレポ 金井 咲季

村井純理事は、日本のインターネットの基盤構築や運用に長年携わり、その多大な功績から「日本のインターネットの父」とも呼ばれています。現在はデジタル顧問などを務めており、2025年4月より本学理事（非常勤）に就任しました。

村井純理事講演会
「インターネット文明」取材しました

2025年9月29日、講堂大ホールで多くの学生や教職員が参加し、本学の理事であり、慶應義塾大学特別特区特任教授の村井純理事の講演会が開催されました。講演はインターネットの歴史から技術の進化、そして社会への影響まで幅広い内容でした。スマートフォンの登場やコロナ禍などを経て、あらゆる場面でインターネットとAIが活用され、社会を支える時代となっています。村井理事は、その中で集められた膨大なデジタルデータやAIを、安全に利活用してさまざまな課題の発見と解決につなげることの重要性を強調しました。また、簡単な作業をAIが代替し、人は自分がやりたいことに専念して、より高いクオリティを目指すことが大切であると述べました。インターネットやAI技術が急速に発展し社会が変化している今、便利さの裏にある不安を感じることもありますが、生かせば自分の人生や社会を豊かにできるのか、また、誰のためにどう役立てられるのか、前向きに考えるきっかけとなりました。